
タイムカプセル

zojis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムカプセル

【Nコード】

N0676I

【作者名】

z o j j i s

【あらすじ】

しばらく故郷を離れていたある男のもとに、同窓会の案内状が届く。そこには中学時代に埋めたタイムカプセルを掘り起こすのでぜひ参加を、という知らせがあった。忙しい毎日に疲れ果て、都会に出てきた頃の夢を完全に忘れていた彼は、昔の自分が今の自分に一体何を望んでいたのかを知りたいと願い、参加する事にした。幼い頃の自分が埋めた、タイムカプセルの中には・・・。

タイムカプセル

1

最後にこの駅で降りたのはいつだったろう。

懐かしい潮の匂い、刺すように明るい太陽の光。

本当に久しぶりの帰省だった。

都会の大学に行くため地元を飛び出し

最初のうちこそ田舎の空気を吸いにちよくちよく帰っていたが

次第に、足が遠のくようになっていった。

今もここに残る昔の自分の影に責めたてられるような気がしていたから。

「都会で一旗あげてやる」そんな青臭く根拠の無いでも気持ちのエネルギーだけはみなぎってた自信をここを離れるまでは確かに持っていたんだけれど。

2

そんな僕を地元まで引っ張ってきたのは一枚のハガキだった。

『同窓会のお知らせ 二原中学校 ○○年卒業生同窓会』

今まではこの類の誘いはあれこれ理由をつけて全て断ってきたが今回だけは違った。ハガキの最後がこう結ばれていたのだ。

「なお、会の最後にタイムカプセルを開封します。

若りし頃の自分からのメッセージを受け取りましょう。」

この一文が、僕に帰省を決意させた。

知りたかったんだ。

現実ってやつにやつつけられる前の僕が

一体どんな想いで未来の僕を見ていたのかを。

久々の実家で一晩ゆっくりし

少し余裕を持って会場である中学校に行った。
会が始まるまではまだ時間があるので

懐かしい校舎をぐるり回ってみる事にする。

壁が塗り替えられて見た目に少しきれいになってはいたが
それ以外は何も変わっていない。

下駄箱、掲示板、職員室、トイレ。

全部思い出の中あの頃のままだった。

聞き覚えのあるビブラフォンの音の後、校内放送が響く。
会の始まりの知らせだ。

中学校生活最後の一年を過ごした教室に向かう。

髪型や苗字がすっかり変わっているヤツも結構いたが
どれも忘れる事ができない顔ばかりだった。

「おう、久しぶり！」あいさつはたったこれだけ。

あとはお互いの近況を報告しあう。

すっかり偉くなっていたり、立派に家庭を守っていたり
それぞれが一生懸命に生きていた。

みんな頑張ってるんだな。いや、僕だって頑張っているさ。
頑張っているんだ。

でも・・・。

時間はたちまち過ぎていく。

教室での歓談は終わり、いよいよメインイベントである
タイムカプセルの開封が始まる。

グラウンドの隅の皆で作ったトーマスボールが目印だ。

当時の学級委員がシャベルで地面を掘りはじめた。

ほどなくして周りから歓声が上がる。

嚴重にビニールで包まれた、丸いプラスチックの容器が出てきた。

中には一人一人の名前が書かれた袋があり

その中にはさらに小さな箱が入っているはずだ。

先生が土を落として容器を開け
名前を呼びながら袋を手渡してくれる。
僕の名前も呼ばれた。少し緊張しながら受け取る。
もう憶えてはいないけれど、この中には未来という言葉
希望という言葉に置き換えていた自分がいるはずだ。
昔の僕は、今の僕に何を期待してたんだろう？
すでに自分の箱を開けたヤツらは照れくさそうに
お互いの思い出を見せ合っている。
それを横目で眺めつつ、僕は袋から箱を取り出した。

2

「ただいま。」

実家の玄関が少し重く感じる。
もう建てられてから20年以上経つ家だ。
そろそろガタがきているのか
それとも僕の気持ちは何もかもを重くさせているのか。
タイムカプセル開封後は場所を移動し
駅前の小さなホテルでパーティが行われる事になっていたが
僕はそれには参加せず帰る事にした。
皆にはこれから少し用があるので、と適当に断っておいた。

縁側に面する日当たりの良い和室が実家にはある。
まるで濡れのようになっまってしまっている僕の心だが
あの特等席においておけば、少しは軽くなるんじゃないか。
荷物をおろし、スーツのジャケットを脱いでハンガーにかけ
縁側の陽だまりに体をあずけた。

昼を回って少し柔らかくなつた日差しが心地良い。

もう残してきた仕事も何もかも放り出して

このままここに居座ってしまおうか。

そんな気持ちになっていた。僕は、なぜ――

後ろの障子がからりと音を立てて開いた。

親父がビールビンとグラスを二つ持って入ってくる。

「おう、帰つとったんか。どうじゃった、同窓会は？」

そういえば昨日は泊りがけの仕事だと言つてたっけ。

今帰ってきたんだろう。

まだ作業着のままだったが変に几帳面なところがあり

グラスを持つ手だけは洗つた形跡がある。

「ああ、楽しかったよ。」

手渡されたグラスに注がれるビールを見ながら、それだけ返事をした。

「そのわりにやあなんや、暗いのう。その年でいじめか？」

親父がいたずらっぽくにやりと笑う。

「そんなんじゃない。タイムカプセルだけ貰つて帰ってきた。」

「タイムカプセル？あゝ、なつかしいのう。中身は見たんか？」

「……。」

「あれ埋める時よのお、あん時あお前……ありゃ？お前もしかして……。」

「……。」

「中身見て落ち込んだるんか？」

「……悪いか。」

「たまらずビールを飲み干した。」

黙つてグラスを親父に差し出し、おかわりを催促する。

「あれ見て落ち込むいうこたあ、さては全部忘れとるの。」

ビールを注ぎながら親父が言う。

「何を。」

「お前は昔から忘れ物が多いいけえのう。三つ子の魂百までか。」
「だから何を？」

「ちいと待ちよれ。ビールがのうなったわい。」
どつこらしよと親父が立ち上がって出て行った。

確かにカプセルを埋めた当時の事は何も覚えていないが
あの中身を自分自身への諦め以外にどうとらえればいいと言っんだ。
当時の僕は、未来の僕に何も期待していなかったんだ。
親父が戻ってきた。

「チーズがあつたわい。お前好きじゃったろ。」
少し嬉しかった。黙って6Pチーズを受け取る。

「じゃあこの記憶力抜群のお父上様が、話してやろうかのう。」
もったいぶりながら親父は続けた。

「はつきり覚えとるわい。あれを埋める前の晩じゃったの。」
今のお前にさらに輪をかけてアホやった中坊のお前はのう……。」「

3

僕は今帰りの新幹線の中にいる。

十数年前、地元を飛び出し行き着いた街へ、帰るのだ。
東へ。僕を乗せた列車が走っていく。

いつもは通路側に座るのだが、今回は窓際の席を予約した。
空の青と山の緑に少しずつ街の灰色が強くなっていく。

思えば生まれて初めてこれと同じ行き先の列車に乗った時は
本当にわくわくしたものだった。

都会は歓迎してくれている。そう信じていた。

何度か行き来しているうちにこの「街の灰色」はただ冷たいリアルを思い起こさせるだけのものになっていったんだ。

だが、今の僕は違う。

もちろんあの頃持っていた新鮮さには届かないけれどももう僕の、僕が抱えている現在^{いま}に負けたとを感じる事は無いだろう。

「今のお前にさらに輪をかけてアホやった中坊のお前はのう。」

親父は覚えてくれていた。僕はあの時――

「何を埋めるんなあいうて聞いたらのう、こう言いよった。」

何よりも信じていたんだ。自分を。自分の可能性を。

『わしのやりたい事が、こげな小っせえ箱に入りきるかいや!!』

「ほんまにアホやる。誰に似たんかのう。」

言いながら親父は笑っていた。僕も笑った。

幼い自分の大口を笑ったのか。

今の自分の小さすぎる悩みを笑ったのか。

それは自分でも分らない。

ただ、笑いたかった。

あと五分程で駅に着く。

ジャケットを着直し、荷物棚からカバンを降ろした。

カバンの中にはごちゃごちゃと雑多な荷物と、そしてあの小箱。

そつと開けて窓際に置いた。

隣の席の客が少し怪しいものを見るような目で僕と箱をちらちらうかがっている。

そりゃあ気になるだろうな。

空っぽの箱を大事そうに眺めながら

にやにやしている人間が隣にいれば。

景色はゆっくりとスピードを落とし、やがて止まった。

カバンを右手に、箱を左手にとつて新幹線を降りる。

シーズンではない為ホームに人はあまりいない。

荷物は重かったが足はずいぶん軽くなっている。

「お前からのプレゼント、なかなか効いたみたいじゃわい。」
心の中で箱に語りかけてみる。

「それにしても中坊のくせに、なかなかやりよるのお。」

周りに人が少なくて助かった。一人なのに笑顔が止まらない。

あの時具体的にどんな夢を持っていたのか

もう思い出すことはできないけれど、でも。

僕はどこに行つたつて、何をしてたつて良いんだ。

少しだけ周りを確認し、箱を頭の上にかざしてみた。

プラスチックでできているそれに太陽が透けて見える。

とても眩しかった。

この小さな空間はそのまま空と繋がっていて

そして空は世界中と繋がっている。

お前が考えていた事と形が少し変わっちゃったかも知れないな。

でも、これからこの中に何を詰め込むかは

悪いがこの先の僕が決めさせてもらう事にしよう。

もつとも・・・入りきらない可能性も、あるけどな。

あとで部長に連絡を入れてもう一日休ませて貰おう。
田舎と比べるとどうしてもくすんで見える都会の空が
今日はなんだかいつもより高く感じる。

明日はどこへ行こうか。

（後書き）

実際に自分もタイムカプセルを埋めた事があったのですが、その時、こんなんだったらカッコ良かったのにと思いついたお話です。ネットに公開した物語としては初めての作品。楽しんで頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676i/>

タイムカプセル

2010年10月18日09時30分発行